

● *Night Fall*

くら やみ
暗闇にうかぶ顔

J.エイケン作 落沢忠枝訳 小林与志画



くらやみ 暗闇にうかぶ顔

J.エイケン作 露沢忠枝訳 小林与志画



訳者紹介 落沢忠枝 (ふきざわ ただえ)

日本ペンクラブ維持会員。日本翻訳家協会理事。主な訳書はヘンリー・ジェイムズの「ねじの回転」、ハドソンの「緑の館」、コンラッドの「ロードジム」、クリスティの「オリエント急行殺人事件」、ストーンの「リンカーン夫人伝」等多数。児童書では「マガーク少年探偵団シリーズ」「黒ギツネと少年」がある。

画家紹介 小林与志 (こばやし よし)

1925年東京に生まれる。太平洋美術学校で洋画を学んだのち、1960年頃から本の装幀、挿画の仕事を手がける。児童図書の仕事に「絵にかくとへんな家」「十三歳の夏」「風のむこうの小さな家」ほか多数の作品がある。

あかね世界の児童文学

28

暗闇にうかぶ顔

訳者

ふきざわただえ
落沢忠枝

発行者

岡本陸人

印刷

新興印刷製本株式会社 (本文)
錦明印刷株式会社 (オフセット)

製本

株式会社 文麗社

発行所

株式会社 **あかね書房**

東京都千代田区西神田3-2-1 〒101

電話 03 (263) 0641 〈代〉

振替 東京 3-64150

1981年4月25日第1刷

NDC 933

8397-16828-0027

暗闇にうかぶ顔

J. エイケン作 落沢忠枝訳

あかね書房 1981

214p 21cm (あかね世界の児童文学28)

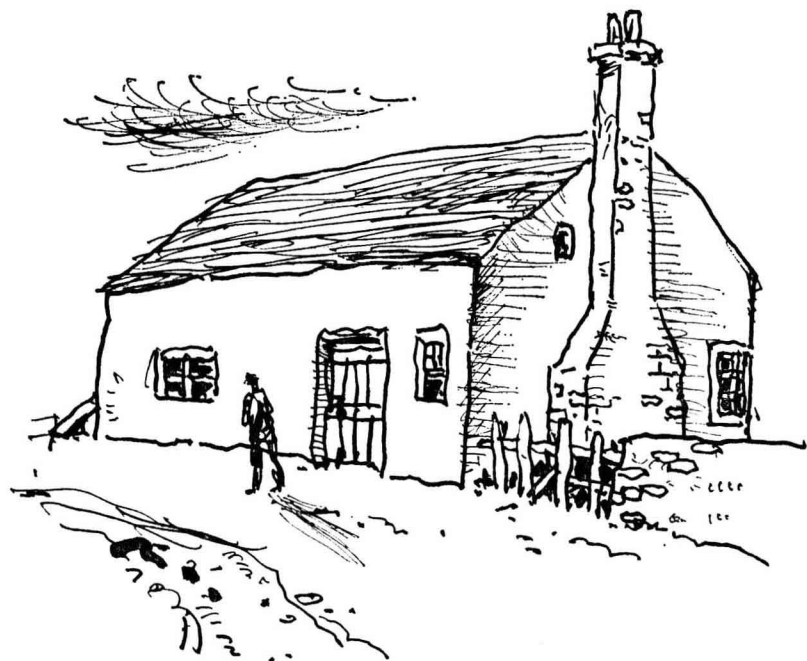
©

1981 T. Fukizawa

訳者との契約により検印なし
落丁・乱丁本はおとりかえします
定価はカバーに表示してあります

暗闇^{くらやみ}にうかぶ顔

もくじ





- 1 お母さんの死——6
- 2 美少年ジョージ——21
- 3 婚約——40
- 4 せまり来る恐怖の夢——65
- 5 色あせた絵はがき——74
- 6 謎の波止場へ——87
- 7 不思議な空き家——91
- 8 迷宮入り殺人事件——111



9 殺された男の肖像 113

10 領主の館への招待 136

11 消えた肖像画 155

12 窓からのぞいた顔 183

13 永遠の愛 188

* 作者と作品について 210

NIGHT FALL

Text Copyright © 1969 by Joan Aiken

Japanese translation rights arranged with Joan Aiken,
% Brandt & Brandt Literary Agents, Inc., New York
through Tuttle-Mori Agency, Inc., Tokyo

暗闇^{くらやみ}にうかぶ顔

ジョーン・エイケン
落沢忠枝訳



1 お母さんの死



わたしがジョージに出会った日。ああ、あれは、一番悪い日だったわ！ でも、もっと悪い日があった——それより三週間前に——。

その日、サンセット・ブルバールで、わたしのお母さんとラルフは、自動車事故で死んだのだ……。

きつと新聞に、大きく出たにちがいない——二人とも、映画スターだったから。でも、わたしはまだ九歳で、そんなことわからないし、みじめすぎて、そんなことどうでもよかった。

ラルフはわたしの義理の父で、本当のお父さんではなかったけれど、とても親切で楽しかった。わたしをポップシーペタルちゃんと呼んで、いろんな愉快な遊びをしてくれた……。〈本当のお父さんを、そのころのわたしは、ほとんどおぼえていなかった。〉

そして、わたしのお母さん——ああ、たった一人の、美しい、美しい、かけがえのないお母さん！

わたしたちは三年間、ロサンゼルスに住んでいた——前に住んでいたイギリスのことは、あまりおぼえていなかった——でも、わたしは、カリフォルニアの暑さが好き^すだったし——大きい、白い、スペイン風のわたしたちの家も好きだったし——のんきなアメリカの子どもたちも好きだったけど……。

やっぱり、わたしはなんとなく、自分が異国人^{いこくじん}のような、イギリス人のような感じがして、いつくりしなかった。

だけど、わたしのお母さんは、いつもそこにいて、わたしをしあわせにしてくれた——ああ、あのくすぐるようなあたたかい声、はちみつ色の赤い髪^{かみ}の毛——お母さんはいつも、人生はすばらしい、バラ色の、平和のシンボルだと信じきっていたわ。

——突然あるトラックが、ブレーキを踏みそくなって、お母さんの車にぶつかる瞬間^{しゆんかん}まで。そして、けたたましい真昼^{まひる}の電話で、わたしの人生の土台が、めっちゃめっちゃにくずれ去るときまで。

わたしは今もまざまざと思い出す……お手伝いのサンシーが、おびえた目でわたしを見つめながら、人々と話していた光景^{こうけい}を。テレビのローカル・ニュースを聞いて、近所の人々が集まって来て、わたしに聞こえないように、ひそひそささやき合っていた。

「かわいそうに、あんなに小さいのね！ このアメリカには、あの子のめんどろをみる身内^{みうち}

は、一人もいないんでしょう？」

あのときわたしは、とても信じられない不幸にぼうつとして、なんにも耳に入らなかった。でもあとになって、あのことが、何回となく、わたしの耳にもどって来るようになった。

同じ大通りに住んでいたヴァン・ヘフリン夫人という人が、二、三日の間、わたしを自分の家へ連れて行って、にぎやかな家族といっしょにめんどろをみてくれた。でもわたしは、やっぱりぼうつとしていて、みんなが親切に催してくれたバザーも、ピクニックも、娯楽センターの遊びも、ほとんど夢うつつだった。

やがて、ごくあっさり、わたしの未来が決まった。実のお父さんが、イギリスから電報をよこして、ロンドンへ行く途中のストレンジウェイと言う老夫婦に、わたしをたのんだのだった。わたしは飛行機に乘せられて、イギリスに行き、そこで新しい生活がはじまった。

人々がわたしの前に食事をおいて行き、またとりに来た。わたしは救命ジャケットを着せられ、言われるままに、安全ベルトをしめたり、ほどいたりした。でもわたしはなにが起きるのか、ほとんど無意識だった。

わたしの頭はただ、ぼんやりくり返すだけだった——お母さんは死んでしまった。もう二度と会えないのだ。もうけつして二度とあのあたたかい手を握ったり、おやすみなさいのキッスをすることはできないのだ。もう二度とふたたび、お母さんがドレスを着てパーティーに行く姿

を見ることも、お母さんのすばらしい、金色のさざ波のような笑い声を聞くこともできないのだ。――あの人の心をわき立たせるような、楽しい声のために、お母さんは、フィズ（シュッとあわ立つ音）というニック・ネームだった。

「フィズ、もうしたくできた？」ラルフが階下から叫んだ。「猛スピード出さないと、二人とも初日におくれるよ。」

「ただ、メギーに、おやすみなさいを言ってるだけよ。すぐおりてくわ――。」

そしてお母さんは、もう一度わたしを抱きしめながら、いつもの夜のことはを交わし合った。「よくお眠りなさい！ 楽しい夢をぐらんなさい！」

「お母さまも同じでね！」

「メギーちゃんも同じでね！」

「お母さまも同じでね、いつまでも、いつまでも、いつまでも。」

でももう、二度とふたたび、ああいう夜はこないのだわ。もう二度とふたたび……。

わたしは悲しみの霧をすかして、ぼんやりお父さんのことを考えた。

別れてから四年になる。ぼんやり思い出すのは灰色の髪と、灰色の顔をした、お母さんよりずっと老けて見える、くたびれたようすの男の姿だった。

その人は、めったに家にいなかった。わたしのおぼえているのは、たいてい朝鮮戦争に行っ

て留守^{るす}だったことと、けっしておじやまをしてはいけないことだった。

「しっ、静かに。お父さまは、ご気分が悪いの、いらいらさせないでね。」

「なぜ気分が悪いの？　どうかしたの？」

「お父さまは捕虜^{ほりょ}収容^{しゆうよう}所にいて、とてもひどい目に会ったのよ。だからわたしたちは、そうぞうしくしたり、めんどろかけちゃいけないのよ。たいそうお疲れ^{つか}れで、ご病気^{びやうき}なの。」

お母さんは、こういう生活に自分を合わせるのが、大変だったんでしよう、わたしと同じように。

お父さんについては、これっきりなにもおぼえていない。きっと、それからまもなく、お母さんは、わたしを連れてアメリカへ行ったにちがいない。やがてわたしは、ラルフが、わたしの新しい継父^{ままたちち}になるのだと教えられた。

わたしは不安^{ふあん}にびくびくしながら、実のお父さんに会ったとき、わかるかしらと思った。お父さんは、わたしを見て喜ぶかしら？　なにをしてくらしてるのかしら？　ことによると、また結婚^{けっこん}したかもしれない。わたしは暗い気持ちで、今までに読んだ悪い継母^{ままたはは}の物語を思い出した。

そのうちわたしは、せつない気持ちで眠^{ねむ}ってしまった。

終点のロンドン飛行場に着いたのは夜の九時だった。わたしは冷たくふるえながら、あたふ

たと通り過ぎて行く人々を、じつとながめた。思い出の中のお父さんに似た人は、一人もいなかった。だれも、わたしに見向きもしなかった。

ことによるとお父さんは、わたしを迎えに来てくれなかったのかしら？ ことによると、お父さんは、わたしをほしくないのかしら？ お母さんが、お父さんをおいて逃げたとき、怒ったかしら？ それとも、今のわたしのように、お母さんを慕ってさびしがったかしら？

そんなことを考えたのは、これがはじめてだった。

そのとき、一人の女が、人ごみを分けて、わたしたちの方へ近づいて来た。わたしはじつと彼女を見ながら、心の中で、あの人がこっちへ来ないでほかへ行ってしまうようにと願った。でも、その人は立ちどまった。

その人は、小さな、やせた、白髪頭のきつい顔だちの人で、冷たい目をしていた。黒い光ったむぎわら帽子の下で、髪を束髪にし、ぐっと流行おくれの奇妙な灰色のスーツを着て、ふくらはぎの中ほどまでたれたスカートをはいていた。靴は黒で、白い絹のブラウスには、金めっきのピンがとめてあった。

女の人は、口をぎゅっと結び、まゆをしかめて、わたしを上から下までじろじろながめた。彼女のあごにはほくろがあつて、そこから毛が三、四本とび出してるのが見えた。

「ストレンジウェイご夫妻ですか？」と、彼女は言った。「これが、フレイザーの娘さんで？」

わたしは心臓がどすんとみぞおちの中に落っこった。これが、わたしのお父さんの後妻だろ
うか？ 彼女のぞっとする、冷たい敵意を感じて、わたしはすぐ、できるだけ遠くへ、じりじ
りとあとずさりした。

「ふん、だいぶ荷物があるじゃないか。」ストレンジウェイ夫婦が行ってしまうと、女はそれ
を持ちあげながら言った。「どうやら、タクシーがいるね。遠くなくて幸いだった。」

ロンドンの通りは暗く、湿っていた。光る舗道に、落ち葉が青くうかんでいる。わたしは、
きれいな薄い、サマー・コート姿で、ぞっと身ぶるいした。

「ふん、ばかげてるね。」と、わたしの連れは鼻あらしを吹いた。「そんな服装で、あんたを送
りこむなんて。ちゃんとした、まともな服を、買ってあげなくちゃいけないね。」

彼女は嘆かわしそうに言った。

わたしは、彼女が運転手になんと言ったか聞かなかった。でもまもなくわたしたちは、かな
り大きな家の並んでいる、暗い静かな通りでとまった。わたしには、まるで見おぼえがなかつ
た。わたしが懸命に思い出そうとしていると、勢いよく体をゆすぶられて我にかえた。

「さあさあ！ ここで眠っちゃわないで！ いそいで、この荷物を手伝いなさい。」

くらくらしながら、わたしは自分のカバンを持って、玄関の急な段々をのぼって行った。運
転手は、チップが少ないとぶつぶつ言いながら、代金を受けとり、わたしたちは、小さなあか

りのついたホールへ入って行つた。

灰色のアルパカ・ジャケットを着た小男が、地下室から、びっこをひきひき階段をのぼって来た。

「早かったね、ミリー。」と、男は言つた。「そうか、連れて来たか。」

男は横を向いて、わたしの方にゆっくり頭を動かした。でも、わたしを見もせず、あいさつもしなかった。

「ふん、早かったか！ わたしや一年も待たされたよ。飛行機が、四十五分おくれてさ。霧で。」

女は、まるでわたしの落度おちどのように、ふきげんに言つた。

「おれがカバンを持ってやろう。」

男はびよんとびっこをひいて、また一段のぼつた。

「あんたは、まっすぐベッドに行くのが一番いい。」ミリーと呼ばれた女は、わたしに言つた。

「なにか食べたい？」

「いいえ、ありがとう。」

と、わたしは小さい声で言つた。涙でのがつまつたように痛かつた。

「ミルクを飲むほうがいいよ。」女は言つた。「じぎ持つて来てあげる。さあ、上へ行つてなさい。二階へのぼって右手の部屋だよ。そこへアーサーが、あんたのものを入れているわ。手を

洗^{あら}うのを忘^{わす}れずにね。おふろ場は反^{はん}対^{たい}側^{がわ}。」

そろそろと、わたしは急^かい^いな階段^{かいだん}をのぼって行^いった。わたしが荷物^{もつ}のおいてある部屋^{へや}をみつけたときは、もう灰^{はい}色^{いろ}のジャケッ^ツトを着^きた男^{おとこ}は、い^いな^なかつた。

——まさか、あの人^{ひと}が、わたしのお父^{ちち}さんじゃないわ？ たしかにちがうわ。もしそうなら、わたしおぼえてるはずよ。き^きつとどこかに見^みおぼえがあるわ——。

わたしは、ねまきを引^ひっぱり出^でし、ち^ちよ^よつと手^てを洗^{あら}ってベッ^どにはいのぼ^のつた。しばらくすると、女^{おんな}がミ^ミルク^{ルク}のコッ^ップ^プを持^もつてあらわれ、い^いや^やな顔^{かお}をして、わたし^{わたし}の荷^もつ^つをじろ^ろじろ見^みた。「これはぜんぶ、朝^あ解^{かい}かなきやいけ^いないね。」

女^{おんな}はそう言^いうと、電^{でん}氣^きを消^けして出^でて行^いった。

ベッ^どは冷^{ひや}たかつた。わたしはぎ^ぎぢ^ぢなく横^{よこ}になつて、小^こさ^さく丸^{まる}ま^まつた。足^{あし}をのぼすと、氷^{こおり}の海^{うみ}に、すべりこみそ^そうでこわかつた。乗^{のり}り物^{もの}の中^{なか}でた^たくさん眠^{ねむ}つて来^きたので、こんどは目^めがさえてしま^まつた。も^もつと毛^{もう}布^ふがほしかつたし、湯^ゆたんぼもほしかつたけど、ベッ^どから出^でて、たのみに行く勇^{ゆう}氣^きがなかつた。

やがてわたしは、不安^{ふあん}な眠^{ねむ}りに落^おちてい^いつた——。

その長^{なが}い、冷^{ひや}たい、苦^{くる}しい夜^よに、わたしははじめて、あ^あの夢^{ゆめ}を見^みたのだつた——あ^あの恐^{おそ}ろしい夢^{ゆめ}——それからの十^{じゅう}年^{ねん}間^{かん}くり返^{かえ}し、くり返^{かえ}しもどつて来^きて、わたしをお^おび^びやか^かし続^{つづ}けたあ^あの